

題目：両親間葛藤の中で育った子どもの〈自己〉に内在する〈抵抗〉

—キャロル・ギリガンの〈中核的自己〉の視点から—

大阪大学大学院人文学研究科博士後期課程2年 齊藤如穂

本発表では、両親間葛藤（過度な夫婦喧嘩）の中で育った子どもの〈自己〉と不適応行動に対する新たな解釈として、ギリガンの〈中核的自己〉の視点を軸にしながら（1）両親の関係性が分断することへの〈抵抗〉、および（2）両親間葛藤の中で構築された〈自己〉を喪失することへの〈抵抗〉が、子どもに内在することについて明らかにする。

発達精神病理学分野では、両親間葛藤が子どもに影響を及ぼす機序として、「認知状況の枠組み論」および「情緒的安定仮説」と呼ばれる2つの主要モデルが米国にて提唱されている（Grych & Fincham 1990；Davis & Cummings 1994）。これら2つのモデルを基盤として、わが国でも両親間葛藤の中で育った子どもは、〈自己非難〉したり自尊感情が低下したりすることで不適応行動が出現すると報告されている（川島、眞榮城、菅原、酒井、伊藤 2008；廣瀬、濱口 2021）。すなわち、両親間葛藤の中で育った子どもは、青年期の発達課題である〈自己〉の確立が困難になり精神的問題が生じやすいと考えられている。

他方、キャロル・ギリガンは『もうひとつの声で』において、他者と自己の分離のみを発達の道すじとする従来の心理学理論を批判し、他者との関係性の中で自己を定義する発達の道すじがあると主張した（Gilligan 1982）。この主張についてギリガンは『歓びの誕生』と『抵抗への参加』において、他者との分離が身体と感情に根差した〈中核的自己〉を喪失させるため、その喪失への〈抵抗〉として子どもたちに不適応行動が生じると論を發展させている（Gilligan 2002, 2011）。ギリガンの〈中核的自己〉の視点から両親間葛藤の中で育った子どもを捉え直すと、子どもは葛藤によって両親の関係性が分断されることへの〈抵抗〉として、〈自己〉を否定的に認知し不適応行動が出現すると解釈することもできるだろう。ギリガンの援用によってこのような解釈がなし得る一方、ギリガンは同著の中で、人と人との相互的な信頼関係の中でのみ〈中核的自己〉の喪失から回復できると述べており（Gilligan 2002, 2011）、両親間葛藤が解決しないまま育った子どもは〈中核的自己〉を感じる事が難しいとも解釈され得る。この解釈に則ると、両親間葛藤が解決しない場合に子どもは、ギリガンが提唱した発達の道すじにおいても〈自己〉を定義することのできない未成熟で精神的に不安定な存在として一面的に捉えられてしまう。

以上の点を批判的に考察するために、本発表では、（1）ギリガンが〈中核的自己〉を論じる際に参考とした神経生物学者ダマシオの〈自己〉論に立ち返る。ダマシオは『意識と自己』において、〈中核的自己〉は身体から感じる体験を“自分がしている”と認識する一時的な自己であるとし、その〈中核的自己〉が積み重なることで自分の人生という物語としての〈自伝的自己〉を構築すると述べている（Damasio 1999）。つまり、ダマシオの〈自己〉論に立ち返り、その原初的な理論を再評価することで、両親の間に信頼関係がなかったとしても、その関係性の中で体験した一刻一刻によって子どもの〈中核的自己〉が構成されることを提示する。さらに（1）の作業を通じて、（2）ギリガンが信頼関係の欠如した中で構築される〈自己〉を周縁化している可能性についても検討する。